

首羅山，背景の宋人社会と禅宗化

服部，英雄
九州大学大学院比較社会文化研究院：教授：日本史

<https://hdl.handle.net/2324/21738>

出版情報：pp.229-233, 2012-03. 久山町教育委員会
バージョン：
権利関係：

4. 首羅山、背景の宋人社会と禅宗化

首羅山とアジアの関係を示す物証の第1は山頂の宋風獅子2体である。毬（紐付き）を持つオスと子を抱くメスからなる獅子像は、中国では当たり前にごこの寺にもあるが、日本にはほとんど見られない。これを勧請した人物は中国人の可能性がすこぶる高く、かつ二世ではなく人生の前半を中国大陸で過ごした人物である。獅子は将来品であって、この山を信仰した宋人が搬入したと考える。また天仁二年（1109）銘のある経筒底にみえる中国人名「徐工」と山頂にある中国産と推定できる二基の塔（「薩摩塔」）も強い示唆を与える。近年薩摩塔形式の石材のいくつかが科学的分析され、その結果、浙江省産出、梅園石（寧波市鄞州区梅園郷梅錫村華興塘に現在の石切場がある）の化学組成に酷似すると報告されている。当時宋人は莫大なる富を所有した。

平安時代から鎌倉時代にかけて、箱崎や博多を拠点とする宋人が旺盛な活動をした。かれら宋人がいかなる経緯で首羅山を崇拜対象とするようになったのか。その背景を考えたい。

*加藤和歳「太宰府所在薩摩塔の応急的保存修復処置」『九州歴史資料館研究論集』34、2009

大木公彦・古澤明・高津孝・橋口亘「薩摩塔石材と中国寧波産の梅園石との岩石学的分析による対比」『鹿児島大学理学部紀要』2009

桃崎祐輔「福岡周辺の中国系石造物研究の課題－寧波・梅園石製石造物搬入の実態と背景－」『寧波与福岡文化遺産保護検討交流』学術交流会、2010

なお文献によれば鎌倉時代に首羅山を再興した悟空敬念がいて、『本朝高僧伝』によれば寛元年中に宋に渡り、径山の仏鑑禪師（無準師範）に師事しようとしたが叶わなかったとある。首羅山由来（『筑前町村書上帳』）でも「在唐十七ヶ年」とある。詳しくは本報告書所収の伊藤幸司氏の論考に当たられたい。この首羅山の禅僧による中興、禅宗寺院化が日本と中国の交易史を考える上では重要だったことを、本稿では指摘してみたい。

首羅山の歴史は、筥崎宮との関係と禅宗寺院となった段階との二様から考えることができる。まずは筥崎宮との関係からみる。

(1) 筥崎宮と日宋貿易

筥崎宮は日宋貿易の要にあつた。大宰府官人でもあつた筥崎宮司秦貞重らは日宋貿易に積極的に関与して、都の人も驚くような莫大な富を得ていた（『今昔物語集』26ノ16）。その孫は箱崎大夫則重（大宰大監）であつた。則重は『散木奇歌集』に「箱崎の神主のりしげ」とみえる。神主であつて、国家の官吏たる「大夫」であつて、また大宰府在庁（留守）のトップ大監たる権力者でもあつた（『太宰府市史・古代資料編』）。政教分離ではなく、宗教者（神主）であり貿易商でもあつた人物の主導による国家行政・国家貿易が行われた。寛弘二年（1005）、失脚した前大宰帥惟仲がこの秦定重（貞重）の私宅にて死去するという事件もあつた（小右記）。大宰府は当然に一枚岩ではありえず、政



76 筥崎宮

争のつぼであったが、箱崎はつねに一方の勢力を代表していた。大宰府内の対立は摂関政治を行っていた平安京中央の政治対立と結び付いており、当時の管崎宮神主秦則重は藤原道長派であった。

* 服部英雄「宗像大宮司の日宋貿易－筑前国宗像唐坊・小呂島・高田牧－」（『境界からみた内と外』）

国家貿易であるはずの大宰府貿易は、事実上、管崎宮貿易であった。韓国新安沖の沈没船から、荷物の行く先が管崎宮であることを示す木簡が発見されている。管崎（箱崎）こそが古代から中世にかけての日宋交易の拠点であり、そこには宋人街が建設された。仁平元年（1151）管崎に住む宋人（王昇後家）が大宰府官人に襲撃された記録がある。管崎での貿易に対する大宰府支配がうまく機能しない時期もあった（石清水八幡宮宮寺縁起抄）。

この二つの事件、秦則重の時代と宋人襲撃事件との間にあたる天仁二年（1109）に首羅山山頂に経筒が埋納されていたのである。

管崎宮は箱崎にあった管崎社地以外にも、博多湾内沿岸にいくつもの拠点を有していた。

たとえば鴻臚館・警固所の西側入り江である鳥飼潟や、那珂川河口干潟に面した堅糟（堅粕）などがあった。当然に博多にも管崎宮領の一部があった。管崎宮領内には宋人御皆免田が26町と廣大に存在し、そこから宋人が綾錦などの唐物（軽物）を上納していた（承久元年六月 日・石清水文書）。建長五年（1253）宋人船頭（綱首）には、鳥飼二郎船頭張英のように、管崎社領である鳥飼を苗字とするものもいた（八幡管崎宮造営材木目録）。

(2) 天台寺院

管崎宮には神宮寺があつて、その多宝塔は龍門山分塔として建立された。この塔は最澄が発願し、元来宇佐弥勒寺に設置されたものが荒廃したため、管崎宮神宮寺として龍門山分塔が建てられたと考えられる（石清水八幡宮文書・承平七年・937・大宰府牒）。このように管崎宮は天台寺院の九州における拠点であつて、龍門山（宝満山、大山寺＝内山寺＝有智山寺）と一体をなしていた。

龍門山（大山寺）と博多宋人の関係は深かった。永久四年（1116）両卷疏知礼記ほか奥書に永久四年歳次丙申五月十一日筑前国博多津唐房大山船龔三郎船頭房、以有智山明光房唐本移書畢とある。博多津唐房（チャイナタウン）に大山寺が出資し経営する大山（寺）船があつた。その船頭は龔三郎といい、唐房に住む宋人であつた。書写の過程はわからないが、おそらくこの唐房の宋人が将来してきた經典が有智山寺にあつて、それを筆写したという経緯だつたと思われる。このように宝満山（龍門山）大山寺という管崎宮と深い関わりを持つ寺院が、日宋貿易の主体であつた。

もつとも管崎宮と龍門山・大山寺がつねに一枚岩であつたわけではない。とくに宝満山大山寺は天台の総本山である比叡山延暦寺の末寺とされていた。上記奥書のある經典は、いまは滋賀県西教寺にある。この寺は近江坂本にある比叡山の里坊だから、宗教的に大山寺が比叡山とつながっていたことを示している。そして古代中世には比叡山が支配の手を伸ばそうとして、九州在来天台勢力と対立することがしばしば見られた。

首羅山の歴史は、まず管崎を中心とする天台宗教界の中で考えることができ、宝満山や若杉山、宗像社とも深く関連する。

史料が残りわかりやすいのは、首羅山南方の若杉山で、山頂の太祖神社に宋風獅子が残されていた。山麓の佐谷から出土した天治二年（1125）の経筒には、「宋人 馮榮 伏」「弟子 鄭□」とあつ

た。太祖神社(上宮)と佐谷は一体の信仰で、正中二年(1325)の法華経願文(筑前町村書上帳、『鎌倉遺文』二九一五二)によると、箱崎にて法華経一万部を読み始め、若杉山上宮で数千部を読み、左谷山賢聖院(有智山すなわち大山寺末)で結願したとある。



77 若杉山上宮



78 左谷山建正寺

(3) 久原の筥崎社領

箱崎の海上交通に、港湾として重要な役割を果たしたのは多々良干潟である。外洋船である宋船は吃水が深いから、浅い干潟には入れない。沖合はるかに停泊する。荷は舢舨で運ぶ。舢舨が干潟の内部に入る。荷を下ろしたあと、宋船はドックに入り、長い航海による不調を整備し、復路に備えた。

この多々良干潟に流入する多々良川の源流が久原を流れる久原川だった。久原に筥崎宮領が集中することは、既に本書の前編に当たる『首羅山遺跡—福岡平野の山岳寺院』2008に述べた。くり返しになるが、簡単に述べておく。

鎌倉時代の壬生家文書や石清水文書に久原の名前がでてくる(『久山町史』6章中世)。寛元五年(1247)、久原は筥崎社領で、宮田、牟多田という地名があつて、一部は須良山(首羅山)の常実坊の坊地だった。地名はともにいまは伝わっていないが、ムタダは文政八年(1825)の久原名寄帳(町史279頁)に久原村のホノケとしてみえている。600年間は使われた地名だったが、おそらく昭和初期の鉱害復旧による耕地整理で失われた。

久原には薬丸という地名がある。久原薬丸名という名(みょう)が鎌倉時代にあつた。薬丸名は筑前のほか豊前にあつた広域名である。久原にあつたのは全体の一部で、鞍手郡の感田にも薬丸があつた(『同』181頁)。薬丸を『鎌倉遺文』索引でみると、1点伊勢の事例があるほかは九州で、筑前、豊前が多い。また『南北朝遺文』(九州編)索引で検索すると、筑前2例・豊前2例・豊後4例となる。九州北部に薬丸名が分布していた。薬丸名は九州北部に力をもつ者の名(所領)だったことになる。大宰府官人は国境を越えて活動する。大監・小監クラスの大物で、仮名(けみょう、別の名前)を「薬丸」と名乗った人物の所領だったと推測する。地名では八女市にも薬丸があるから、薬丸名は筑後にも所在しただろう。諸国散在のうち、筑前国糟屋郡の分は筥崎宮領になっていく。

おなじく久原にあつた益永(久原益永名)は京都の壬生家に伝領された名で、やはり筥崎宮領になる。益永についても同様のことが指摘でき、『鎌倉遺文』で検索される多数の益永が九州(筑前・豊前)である。

関連して、地名毛後寺に注目できる。「郡鑑」(302頁)では「けごち」とある。ケゴジであろう。

「名寄帳」のホノケでは、けご寺、毛固寺などがある。小字に残る筑前のケゴ地名は、早良郡3（橋本・四箇に警固、東入部にケゴシ）、那珂郡1（那珂に警固町）、志摩郡1（元岡に芥子）である。筑前でケゴといえば、歴史的には警固所であろう。大宰府直轄軍駐屯地、最大の軍事基地である。警固所付属の警固神社は、中世には赤坂山（のちの福岡城）にあった。神宮寺もあっただろう。県内にある複数の地名警固は警固所料田（警固所のための免田）が各地にあったことを示す。警固所免田か、または警固寺関連免田が久原にあったものか。

久原には筥崎社領が多くあったから、社領を有する関係者には首羅山を信仰するものが多くいた。筥崎でも祈祷するが、首羅山でも宗教行事を行った。若杉山同様、筥崎を中心とする放射線状の信仰があった。これを下地に筥崎宮に關係する宋人が首羅山を篤く信仰した。

宋人の信仰は首羅山のみではなく、若杉山や宝満山、油山、飯盛山、背振山、雷山などにも及んでいた（『首羅山遺跡－福岡平野周縁の山岳寺院－』53頁「第4図宋人商人の関与した経筒（1）金属製経筒」）。それぞれ箱崎に注ぐ多々良川、博多に注ぐ御笠川（那珂川）、樋井川（旧流路）、姪浜近辺に注ぐ室見川、今津に注ぐ瑞梅寺川の源流になる。日宋交易を担う港津の源流域だ。

(4) 禅宗と日宋貿易

鎌倉時代になると、禅の影響が強くなって、栄西や円爾が九州で活躍し、筑前肥前には禅の拠点寺院がいくつか置かれた。中国浙江省・寧波の南方、天台山に径山万寿寺という寺があって、無準師範という高僧がいた。この弟子が円爾（弁円、聖一国師）である。博多・承天寺の開山となった。大宰府・宝満山系寺院も、このころになると禅宗の影響を強く受ける。まず大宰府にあった崇福寺がその一例であろう。崇福寺は仁治元年(1240)、宋から帰国した随乗房湛慧が建立した寺で、湛慧はやはり無準師範のもとに参じた僧であったが、円爾の弟子でもあり、翌二年に円爾が開堂式を行った（江戸時代に馬出に移転）。大宰府天満宮自体も禅宗化した。菅原氏出身の鉄牛円心も円爾の弟子である。かれは文永十年（1273）光明禅寺を建立し、ここを拠点に、天神が海を渡ったとする渡唐天神の信仰を広めた。天神が禅に帰依したともいえる。筥崎宮と栄西の対立は興禅護国論でよく知られている。ともにアジアを志向する両者は、必然的に利害が対立したであろう。宝満山系の有智山寺は禅宗も迫害した。しかしそもそも対外的な要素を濃厚に持っていた首羅山（白山）が、急激に中国仏教化つまり禅宗化する。悟空敬念の入寺がそれである（悟空敬念についての詳細は伊藤幸司氏の論考を参照されたい）。

博多在住の宋人のうち、新興派は禅宗の側に親近感を持った。仁治三年（1242）の秋、謝国明は円爾を支援し、禅寺承天寺を開いた（聖一国師年譜）。謝国明は鎌倉幕府において争われている遺領関係者は、幕府ともつながりがあった。貞永元年（1232）謝国明が大山有智山寺の攻撃から円爾を守ったという記事は『歴代鎮西要略』に見え、円爾が宋から帰着した際には博多の諸綱首が来迎院に館したと『聖一国師年譜』にみえる。

(5) 幕府と禅宗と日宋貿易

鎌倉幕府は鶴岡八幡宮寺・勝長寿院・永福寺のように、真言・天台（顕密）、とりわけ真言宗を基盤にしていたが、同時に禅宗にも力を入れた。宋人蘭溪道隆を招き建長寺を、同じく宋人無学祖

元を招き円覚寺など、鎌倉五山を整備していった。それは宗教的な理由だけでなく、日元貿易船（建長寺船）のような経済的な理由もあったからで、新興の宋人グループと結束しやすい禅宗を保護したのである。その前段となる諸現象が半世紀前に箱崎・博多で進行していた。謝国明のような博多を基盤とする新興の宋人は、筥崎宮が独占していた日宋貿易に食い込んでいくために、まず渡宋僧たる栄西や円爾と結びつくことによって、新宗教かつ中国仏教たる禅宗を支援した。栄西は良弁ら箱崎僧による弾圧行動に対し、『興禅護国論』を著して、協調姿勢のなかにも禅の自立を説いた。鎌倉幕府も栄西を鎌倉寿福寺（北条政子菩提寺）の住職に招聘し、ついで將軍源頼家が外護者となって京都に建仁寺を建立した。栄西を東大寺大勧進に任ずるなど新興派の保護を図った。円爾は京都東福寺の開山となった。檀越の九条道家は鎌倉幕府將軍藤原頼経の父である。新安沈没船は積荷の木簡によって東福寺造営船だったことがわかっている。円爾もまた栄西と同じく東大寺大勧進になった。

栄西が警戒し言葉を選んだように、新旧両勢力は敵対することなく協調を図っていった。禅宗は兼学で諸宗を学ぶ今日でも承天寺僧が筥崎宮に参詣し読経する姿がある。東福寺造営料船たる新安沈没船には箱崎行きの荷たることを示す木簡があった。両者は渾然一体化していたが、かつては箱崎が占有していた利権を、幕府やそれに結びつく禅宗勢力が、事実上奪っていったことは否めない。箱崎と結びがちな旧勢力は徐々に排除された。

日宋貿易や日元貿易は、これまでは蒙古襲来によって終焉を迎えたとされてきた。しかし近刊書、シャルロッテ・フォン・ヴェアシュア『モノが語る日本対外交易史』（2011）も強調しているが、南宋を滅亡させたフビライはむしろ交易に積極的で、弘安の役直前1279年（弘安二年）にも日本からの遣元船4隻が2千人を乗せて到着しているし、元の側は慶元（明州、寧波）、澈浦、上海、泉州に市舶司を設置し、対外交易を管理した（右掲書191～3頁）。1298年（永仁六年）には葛西殿、大方殿という執権の妻・母クラスの女性が派遣した、莫大な金塊砂金ほかを積んだ鎌倉幕府船が難破した（青方文書）。

新興勢力の台頭という動きは、博多平野後方の山岳地帯でも起こっていた。天台の牙城の一画たる首羅山が悟空敬念によって禅宗化されたからである。敬念は摂政近衛兼平との師弟関係がわかり、かつ幕府執権北条時頼とも面談している。何らかの支援を得ていた。首羅山の禅宗化には、箱崎や博多の新興勢力たる宋人グループや幕府吏僚（鎮西探題）の支援があったものと想定する。

敬念は円覚経を講じたとあるが、首羅山西谷にある文保二年（1318）銘板碑にも円覚経の一部が陰刻してあった。これは禅文化の一つの物証といえそうだ。禅宗寺院は中国化を進める。大雄宝殿（本堂）では多くの僧による行道が行われる。行道のために四半敷きタイルの使用があったと思うが、土間のままだったのかもしれない。おそらく板張りではなかっただろう。